

2017年度GTセミナー 第46回保育環境セミナー前編 2017.10.16～10.18

第34号 2017年10月23日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社ガガヤ 奥山卓矢

第46回保育環境セミナー開催

先日、第46回保育環境セミナーが東京の竹橋で開催し、
全国から54園、計120名を超える先生方にご参加頂きました。

プログラムは、保育環境研究所ギビングツリー代表の藤森先生の
基調講演、見学園紹介、懇親会、実践園報告、見守る保育の5つの
ポイント、ミマモリングソフトの説明、ドイツ報告、Q&A、
園見学が3日間に渡り行われました。

藤森代表の基調講演「見守る保育の環境と創造」では、質の高い保育の
事例にフィンランドやドイツ、そして世田谷区から発行されている
『なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい～世田谷区の
保育の質ガイドライン』を用いながら講演が行われました。

世田谷区から発行されているガイドラインは保護者向けにマンガと文章
で内容がまとめられています。ガイドラインは世田谷区のHPから、
ダウンロード可能です。

[なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい～世田谷区の保育の質ガイドライン](#)
発行 世田谷区 子ども・若者部保育課

●今年度実施のGTセミナー報告

第44回保育環境セミナー：本誌、第20～21号

GTサミット2017：本誌、第26号

ドイツ×日本「保育研修」：本誌、第28号

第45回保育環境セミナー：本誌、第29～30号



2017年度セミナーテキスト



世田谷区で保護者に
配布されている冊子

セミナーを終えて思うこと

セミナーでは毎回、ドイツ報告というプログラムがあります。

1時間という枠の中で、発表をする新宿せいが子ども園の先生方は毎回工夫を凝らし、発表をしてくださいます。

そして、今回藤森先生の基調講演では、ドイツ、フィンランド、そして世田谷区の事例を元に「質の高い保育とは何か」とお話をしてくださいました。

ドイツ、フィンランドの内容だと、「いいな～、すごいな～」と海外に憧れを抱くように、そして「日本とは違うからな～」と試してみたいがちですが、ここに世田谷区の事例が入ると急に身近な感じがします。

講演で藤森先生は「私がこういう場（講演の場）で話すのは、どの園でもやらないといけないことを話すべきだと思っている。それは世界も共通している。毎年ドイツへ行くが子どもの頃、やらないといけないことはどの国へ行っても同じ。」と仰っていました。

ドイツやフィンランドと他の国の保育とするのではなく、どこでも同じその中で何をするかを考える大切さを今回の研修で感じました。

そして、同時に目指している保育がどんどんスタンダードになってきていると感じ、まさしくこれまでの実践の積み重ねでもあることを感じます。

そして、藤森先生の教員になったお話、そしてその時の経験が今の保育につながっているという内容を興味深くお聞きしました。もっと、聞いてみたい！その続きはぜひ講演録をお読みください。次号に続く。

（報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢）

●過去のバックナンバー

第31号

いきものいっぱい藤崎農場

第32号

築120年古民家『聴福庵』⑦

第33号

臥竜塾年間講座④

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマールジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司

—保育の世界に入ったきっかけ—

皆さんこんにちは、見学してどうだったでしょうか。今日見学した人たちには伝えましたが、私たちが目指している保育がどういう物か。一つは、私は保育の世界に入ったのが、大学は建築科を出た。建築科を卒業する時に卒論で学校建築を選択した。その時に小学校の設計をした。そして小学校がちょうどオープンスクールを導入した学校が使いにくいと、壁ができはじめた頃に卒業し、それをテーマにした。どう使ってどうなのかに興味持って実際に教員の資格を取って務めてみた。地域会、社会教育環境を多くやっていた中で、次第に地域とか親子とかに関心を持った。実家は保育園をやっていたわけでも幼児保育と全く関係なく、建築科を卒業し小学校の教諭となり、たまたま1年生の担任をした。建築へ行き学校を多く見ようと思い、いくつも学校を見れる産休代替え職員として登録した。そうしたら4カ月だけだったが、1年生を担任した。その次の学校では5年生だった。校長から「育休制度ができたので1年間やってもらえるか、4月から1年生を担任してほしい」と言われ私はびっくりした。まだ20代で経験は4か月しかなく、1年生というとおばちゃんの先生のイメージ強かった。まだ20代で男性で産休代替え職員でまだ経験年数は4か月しか経験がなかった。4月からという入学式からですよ。入学式で担任紹介をされ、私は3組の担任で代替え職員として私が出て、親が心配するのではないかとあって校長に「私で大丈夫ですか？」と聞いたら、「大丈夫です。前の学校で1年生が上手だから」と言われたが、そりゃそうです。1年生しかやったことがなかったので。そういったことでこんな、代替え職員なのに丸々1年担当した。これが今に役立っている。どうやって小学校へ送り出したらいいか、入学前の幼稚園・保育園がどんなことをしていたかによってやりやすさがあるもので、一番影響している一つ5年生を3月の2週間を産休代替え職員として担任した。5年生が大変で、その5年生が6年生の担任を私に持たせるとストライキした。校長から「人事まで子どもに言われ筋合い合わない」と言われた。「6年生はちゃんとした先生がいいよ」と生徒に納得してもらったが1年生の教室に行くと、黒板に裏切り者とか書かれた。なかなか大変だった。2週間しか担任をしていないのに「何で？」と子どもに聞いたら、これが重要になる教育だと思っている。例えば5年生の最後の授業は復習をする。復習をどうしようかと考えたときに算数の授業で、子どもたちは割合で躓く。比率・割合が難しい。私は授業で「今日は算数の授業はやめよう、皆で腕相撲大会をしよう！」と私も入った。終わった後に「誰が一番強かったと思うか？」と聞いたら「藤森先生、全部勝ったから！」一番弱かったのはと聞くと？「〇〇くん、全部負けたから！」と答えた。「順番はどうか？」を質問したら勝った回数ではわからない。子どもによって腕相撲をした回数が違ってこの子は8回、あの子は7回とか誰が強いか分からない。そうしたら、一人野球少年がいて打率を出せばいいといった。全部勝ったら10割、全部負けたら0割。その他は打席数で、何割何分何厘と出る。そうすると順番がわかるんじゃないとなって誰が1番目2番目…とした。子どもたちからしたら算数の授業はせず、腕相撲で今日の授業は終わったと思っているが、私からすると割合の復習だった。比べる数とか言っても覚えられないが身近なものでそういう風なことをした。こういうことを各教科したのだから6年生も担任をしると言ったのでしょね。

—伸びる子の特徴—

でも1年生を担当した。今多く言われているようにヘッグマンの研究で、就学前教育の中の認知的なものを早く学ぶことは長期的なIQを高めることに効果はないと言われている。逆に下がってしまうということが出ている。私の場合は、実感した。1年生で授業をすると1年生は数の計算から入る。足し算ができる子は満点。国語も文字を学んできた子は、やらなくてもできてしまう。親たちはあの幼稚園が教えてくれたからよかったと思っていたでしょうね。しかし、その子が今度習っていない分野にだんだん入ると本人はすごく焦る。1学期から勉強しないでも満点だったから、どう授業を聞けばいいのか、どうしようもなくなる。そうすると毎月成績が下がる。それは早く学び過ぎていることだが、親はそう思わない。親は本人が勉強しないからできないと思うが、勉強する癖がついていない。次第に逆転してしまってその子たちはできない子になるのを実感している。早く学んでくる子は知っているとしてしまう。どういう子が伸びたかという、数を教えると前のめりにジーと見てそうなんだ、とすごく感心する子がいる。キラキラしている子たちはどんどん伸びる、凄い喜んで覚える。小学校に送り出すために一番大事なのは興味を持つこと、好奇心を持つこと、知る喜び、学習意欲、学習態度が身につけている子はどんどん伸びる。もう一つ、文字を教える書き方ノートを使って文字を教える。最初「あ」なら「あ」で点線で書いてあって、その後に白紙の枠がある。まず点線通りに書く、早く字を教えていると自分が知っている字を点線の上を書いてしまう。手が自由に動かないうちに字を覚えてしまっている。落書きなどしていない子たちは点線の上を書けない。本来、ちゃんと点線通りに書けないといけない。学校に行く前にやってもらわないと困る。うちの園を見てもらうとわかるが、細かい塗り絵を塗ることでひらがなの「し」や「つ」の動きができるような作業が入っている。十分になってくると文字を教えたときに覚えられる。先に教えることではなく、基礎的なことをやることは大事だと実感した。よく例に出すが一生懸命塾に行っている子たちもいる。出来ることはできるが私の高校の時の同級生で仲が良かった友達は東大にストレートで入って、国家公務員になってAPECの総議長になって、早稲田の総長をしているが、水槽で魚が泳いでいたら、魚の名前は鯉しか知らなかったり、花はチューリップしか知らなかったが、勉強ができるか関係ない。1年生で算数を教えたときに教科書を開くと、公園の絵があった。「この中にチューリップが何本ありますか?」。ドットがあって鉛筆で対応させて色を塗って5本と答える。これが3本だと試験ではx。何でxになったか。当然、算数だから数が数えられないと思うが、どれがチューリップかが分からなかった。塾へ行って花壇で花の名前を教わったことがないので、どれがチューリップか分からない。絵の中のチューリップがどれかわからない。では、2問目で花はどれだったとなったときに、紫陽花は額。これはものを知らないと言えない。これからはそういう問題になる。昔は数式を答えるものだったが、これからは文章を読み解くものが増えてくる。その時に国語を知らないと言えないというように、幼児教育は小学校の先取ってやることではなくて、小学校へ行って伸びること。小学校で習う基礎的なことを学ぶところだと1年生を担当して思った。

—保育の世界に入り感じたこと—

その後、この世界に入って来たので、そのために何をすればいいかを実体験で提案してきたことがまず一つ。もう一つが小学校へ勤めている時に、育休代替職員なのでその学校に1年間しか入れられないので、早くその学校の地域性や子どもを知らないといけない。その時に、地域によって子どもが違うのだと思った。しかし、どの地域でも同じ教科書の内容を教えないといけない。教え方は違う時に2つ。どの地域でもやらないといけないこと、学ばないといけないこと。その方法論は地域によってやり方は園によってちがう。なので、私がこういう場で話すのは、どの園でもやらないといけない

ことを話すべきだと思っている。それは世界も共通している。毎年ドイツへ行くが子どもの頃、やらないといけないことはどの国へ行っても同じ。それをどうする方法でやるかは、地域性や園によって違うのでそこは区別しないといけないと思う。1年生を担当している頃、隣の学区で教えたことがあった。教科書は同じでやりやすかったが、子どもたちの反応が全然違く焦った。まずそれがあるということで話すときも、どの国でも共通することを皆さんに話して、その方法は自分で考えるということ。勤めたときに感じた3つ目。早く地域を知ろうと中学生と知り合ったら、中学生は第一期の校内暴力で非常に悪が多く荒れている中学生と知り合った。その頃は独身だったものだから、夜になると悪の子のたまり場になった。万引き、いじめ、暴走族と昔の悪は今の気志團の髪型で手にはチェーンをまいた子たちがうちに入出入りする中で、色々考えることが多かった。何でこんな悪になったかという幼児期の問題と先生の問題が多かった。そして、ずいぶん先生との関係が影響していた。その頃に今の選択制や習熟度、異年齢を考えるきっかけになった。違う体験をする中で保育園に入ったら保育園は刷り込みが強いと感じた。小学校のような校庭、クラスになっていて「えっ!？」と思った。私は保育の世界を知らなかったので「えっ!？」と疑問を持ち、保育指針が研究されているだろうと思ったが、具体化しているのが違っていると思い提案をしはじめた。次第に私が提案している保育が多くのところが増えてスタンダード化してきた。そういう話なので参考に質の意味でいくつか資料があるのでそれを見せながら話をしたい。

—フィンランドの事例—

小さい記事だがこれは日経新聞の記事。経済新聞だが、これからの時代の特徴が書かれている。タイトルは『保育所・幼児教育の場に』とある。まず経済新聞だと、保育所は女性の社会進出だと思う。保育園がそのために必要と記事に特集を組まれる。そして次に、そのためには預ける場がない待機児解消と出る。それをこの記事では、「幼児教育の場に」と書かれている。女性の社会進出や待機児解消ではなく、「教育の場に」と書かれ普通だったら幼稚園と書くところを、あえて保育所と書かれている。どういうことかということ、保育園と幼稚園の違いは未満児がいるかどうかという意味。ということとは0歳から1,2,3歳未満児の子どもたちに教育の場が必要な時代になったということ。実は乳児に教育が必要になったということ。それは今回の保育指針の改訂の中で、乳児保育と未満児保育が特別に書かれている要因です。よくお見せしている脳の拡大のグラフ。この記事のもとになったのが今の「脳の拡大は0から3歳に大きく成長する」。3歳未満に大きく成長するということがあってピークは未満児。脳は未満児の頃に拡大するので、この頃に教育が重要だと日経新聞が取り上げた記事。これから世界的に乳児保育は重要になってくる。これまでは本来親が育てるべきだ、仕方なく働いているから預けていた時期はそろそろ終わる。未満児、乳児から教育が必要であると、これからなってくると思う、もちろん家庭で育てているのでも構わないのだが、教育が必要になってくる。幼保一体カリキュラム導入進むというのは、まだまだ誤解があるが、幼稚園・保育園が一体のカリキュラムは教育の部分は、一字一句同じになっている。もう一つ、世界的に取り組まれていることが、世界各国が質への注目は高まっている。脳の拡大として大事だけれど、条件は幼児施設の質が高くないといけないということがある。たまたまこういうことに世界が取り組んでいるが日経 DUAL でフィンランドの考え方を見つけた。PISAの学力調査で1位。あるフィンランドの園の園長先生の考え方が書いてあった。「保育園は、両親の不在時に子供の世話をする役割であると同時に、幼児の心身の発達を促す教育を与える機関として考えられています。社会福祉部門の管轄であった保育園は数年前に教育文化省の管轄へと移ったことから、「教育施設」としての保育園の役割が重視されていることが分かります。」フィンランドがどんな保育をしているか参考になる資料があるのでこちらも見てもらいたい。

—フィンランドの教育の今。新聞記事①—

日経新聞に書いてあったのだが、「フィンランドの教育の今」というタイトル。未来を担う子どもたちへの投資。日経新聞に出たように、ソーシャルエモーショナルラーニングについての研修に私が参加した。ボストン大学の教授が話をした。今、子どもたちの教育は将来大変だということを危惧して動き出しているのは、ほとんど経済学者が警告を出している。それは経済から危ないと言われているから。何でフィンランドも変わって来たかという、子どもへ投資をするという考え方から変わって来た。PISAの調査を始めたのもOECD。教育水準が2012年にフィンランドが1位に選ばれている。日本では学習指導要領と幼稚園教育要領が改正されたが、フィンランドにもコアカリキュラムというものが10年ごとに改正される。その中にプレスクールと言って1年間義務教育になった。これは日本でも検討されている。中学3年生までと幼児教育全部で9年間を教育現場ではどんなカリキュラムをするか、日本でもしているがどういう風になっているか。「子どもたちへの投資が未来の国力や社会全体の幸福へつながる」というのは社会的な合意。フィンランドの児童数200名の保育園を訪問した記事。「プレスクールの義務化、遊びを通した生きる力の基礎を学ぶ。国際学力調査の上位常連国であり教育水準の高さで知られるフィンランド。子どもの思考力や自主性を伸ばす教育、国を挙げての細やかなサポート体制により子どもの学力格差が少なく、優れた教員養成課程があるのが特徴。7歳からはじまる、入学前の1年間、6歳を学習の準備期間としてプレスクールとして義務化されている。男女参画が進み女性のほとんどがフルタイムで働き、母親の就労有無にかかわらず、だれもが保育園に入れる権利が与えられている。」ドイツで聞く言葉と全く同じ言葉が出ていた。「悪い天気があるのではなく、合わない洋服があるだけ」。子どもにとって悪い天気はない、悪いのは天気に合わない服装をしているだけと言われ、雨だからと言って園庭に出ないということはない。幼児教育は外遊びの体験を重視するほか、想像力を育み、自分で活動を決め自分で選ぶという自由遊びの時間を大事にしている。自由というのは好き勝手にすることではなく自分で選択すること。毎日、午前・午後は1時間は外遊びの時間を設けている。(最近では合わせて3時間になってきている) 広い園庭で自由に遊んだり、交通機関を使って郊外の公園に遊びに行く。ドイツでも同じで長くつは必ず置いてある。北欧なので夏の日照時間が長い代わりに、冬の日照時間は極端に短く、大人も子どもも太陽光によるビタミンDが不足になりがち。-25°C前後の日が2週間ほど続くが、-15°C以下にならない限りは、外遊びを行う。ドイツでも27°C以上あると園が休みになる。私たちが一度2月にドイツへ行ったことがあったが、森の幼稚園へ行ったら寒くて、寒くて仕方なかった。雨天などは黄色いベストのようなものを着ているそう。園長代理は幼児教育の修士課程を修了している。向こうは幼稚園教諭は大学院を出ている人に限り、大学院を出ていない人は保育士と言って、子どもの世話をする人と分かれている。雨の日にはゴム製の撥水加工のものを着用するなど活動によって、毎日、外遊びを行う。ディレクター的役割の幼稚園教育と現場を担う保育士。先ほど言った縦割り保育で、3歳未満児が1クラス、345歳が一つ。6歳のプレスクールに分かれていることが多い。ドイツと違うのは半日制だが、親が働いているので全日制で最長12時間。希望すれば朝食を食べることもできる。一般的に保育士は3歳未満児は4人に1人。3歳以上は7人に1人。役割はアメリカも一緒だが幼稚園教育は活動計画を立てるほか、幼児教育の観点から保育計画を立て、園のマネジメントを行う。大学の修士課程が必要。保育士は幼稚園教諭が立てた計画に合わせて、保育業務を分担し、資格取得は専門学校レベルでいい。3歳未満の活動は毎日異なって、部屋遊び、外遊び、運動・造形など多彩。1週間単位で決められ、送迎時に親がいつでもプログラムを見れるように壁に貼り出されている。週1回、親へ活動の振り返りをメールで配信している。絵の具などの工作活動は一人ひとりに目が届くように少人数で行い、こういう活動をする場合は2つに分け、一方は工作。もう一方は外遊びとしている。シフトを組んで職員は柔軟に対応する。異年齢なので

小さい子から大きい子までいる。次のタイトルが「遊びを通じて社会性と学びのトータルスクール、プレスクール」と言って準備期間としてプレスクールが取り組んでいること。前は任意参加だったが今は義務教育。プレスクールは、6歳児は9時から13時。この時間だけ小学校へ行く移行の保育の時間。保育園は17:30までだから、8時からの勤務が一般的で17時までには迎えが来る。読み聞かせた絵本は表紙を張っておいて、親にこの本を読ませました、と親に見せている。ゲーム・タブレットの普及から身近な関心から簡単な文字や数字を覚えてしまう。ドイツでも、タブレットを使う保育が流行っている。プレスクールでは、1クラス15人。幼稚園教諭が行いコアカリキュラムに沿って行っている。プレスクールでは、小学校で学ぶ準備をするが数字やアルファベットの習得は机上で教えるのではなく、例えば子どもの名前から「A」と「O」だよとか、身近なものから興味を深め、日常から文字を認識する機会を作っている。ワークを教えているのではなく、生活の中で興味を持てるようにしている。子どもからするとゲームや遊びをしている感覚で、自分の自己の発達に応じた自己肯定意識と学びを強化できるのが特徴。小学校へ行くプレスクールで行っている。日本ではプレスクールというと、小学校の準備期というのが強い。プレスクールで特徴的な活動は針と糸を使って好きなキャラを作るとか、自分で撮った写真を繋ぎ合わせたアニメーションを作るなどと言った、長期にわたる制作活動づくり。将来の学びの可能性を広げる机上の学びではなく、体験を重視する。例えば作品を作る時に、どんなキャラを作りたいかを決め、長期にわたる活動があって、ゴールに到達するプロセスを学ぶ。各方面から視点を学ぶことで、自分で考える力を高める。多方面から知識を併せたクラスの学習計画を決める時も子どもたちが参加して決めていくのがプレスクール。子どもたちが作ったぬいぐるみ、タブレットを使った中ではICTの機会をアニメーション映画を作る位使われている。幼児教育の最重要課題は体を動かすことで助長されるとある。本当ならアクティブラーニングだが、実は学習指導要領からは消えてしまった。プレスクール活動は試合形式のサッカーの練習だったり、2つのチーム別れボールのパスを取り合ったり、体育館を全力で走ったり、ルールを守る、チームワークをつけることが就学前教育です。プレスクールの子どもたちはサッカーに夢中ということで、幼児教育の最重要課題は体を動かすことで学ぶことは助長されると言われている。ここでいう身体を動かすは、砂場でただ座っているのではなく保育の中で1日2時間、思い切り体を動かす時間を作る。最近は3時間必要と言われている。3時間と聞くと長いように思うかもしれないが、階段を上ったり生活の中に入れる。ただ園庭で遊びますだけでな、階段を上ったり下りたりでもいい。色々なものが置いてあって身体を動かす経験を3時間している。家庭環境に近づく大人と子どもの身長差に配慮した机と子どもの椅子。園児の着替え台、これもドイツでも同じで、保育士が腰をかがめなくても着替えができるように子どもの方が高くなっている。おもちゃや絵本が階段の踊り場に置いてあり、わざと上り下りする機会を作っている。大学と連携してより良い環境を作っている。これを観ると私たちが目指す保育に近い。

—フィンランドの教育の今。新聞記事②—

次にこういう新聞記事があった。これからの学力がどうなっていくかという、とどんどん難しくなる。これは正答率が高いのは何かというと、記憶中心の学習は正答率が高いがそれはすぐに減る。最も高いのは計画的学習。記憶的学習はワークを何回もやるのが記憶中心、問題が難しくなるとそれでは対応できなくなる。計画的学習と言って、自分で目標を決め計画を立て振り返り、見通して進捗を管理することが効果が高いと言われ、日本ではここを目指している。しかし、もっと難しい問題になると、もっと関係づける学習が重要と言われている。例えば、図形の勉強で図画工作を思い出すなど、これまで学んだ知識情報体験と結びつける能力。フィンランドの中にも書いてあったが、多方面からの取り組みとい

うことであって、絵を学ぶのも絵を学ぶことだけではなく、絵を学ぶことで音楽を奏でるのに使ったり、何かと関連付けることが大事だと言われている。日本ではこれを総合的学習で行うつもりだったが、上手くいかなかった。これからどんな力が求められるか、それは関連づける力ということで先生から一方的に教えるのではなくて、子どもがブロックをやりながら数を認識したり、細部を考えたり、どう積んだらいいかを考える物理であったり、色々な分野を使って1つのことをすることが大事。遊びが大事というのは関連付けるものが多いからです。これからこういうことが重要と言われている。乳幼児教育はどうかというと、世田谷区がどういう保育が質の高い保育かを保護者に冊子で配った。この前から見せているところに少し足した。先ほど言った私の経験からの話とリンクするところ。

—人間として育てる“底力”を育む—



保育所は人間として生きる底力を身に付けるという言い方をしている。片方はマンガになっている。保護者が二人来た。保育士は子どもが遊んでいるところを見て、保護者が来ているなと思っている。保護者は「ただ遊んでいるだけなのね」という印象を持つ。子どもが掘った穴を湖にしようとお水入れようと遊びはじめる。保護者から見ると、遊んでいるだけに見えるがここに教育がある。水をくみに行く。園長は「子どもの活動から興味を持つ力、探求する力、協調する力、最後までやり抜く力、これらは生きていく上で必要な力。これらの力が人生を生きていく上で必要なだけでなく、この力が育っていないと大人になってもうまくいかない。逆を言えば学校へ行っても必要だし仕事をして必要で、この力を幼児教育で育てるうえで大事なこと。知識ではなくて興味を持ったり、探求する力です。これを「子どもたちがもっとも活動している時間を保育園で過ごします。集中して遊んだり、駆け回ったり、仲間と過ごすかけがえのない毎日を全力で過ごすことによって。子どもたちの心と身体に、人生のこれからの長い年月を生き抜いていく、いわば“底力”ともいうべき力が育っていくのです。」専門的に言うと非認知能力と言われているものを分かりやすく「底力」と言っている。新しい指針では「学びに向かう力」と言っている。そのために「そうした子どもたちの成長を支えるために、保育士は子どもたちの遊びを見守りながら、成長に合わせた玩具（おもちゃ）や道具、絵本などを必要な時に子どもの手の届くところにあるように用意していきます。そうして、子どもたちが自ら遊び込めるような時間を保育士、空間（環境）を整えていきます。具体的に言えば、保育室内ではままごとやお絵かき・造形などの「遊びのコーナー」などが設けられたり、また、園庭では、存分に外遊びができるように、砂場の整備や植栽・園の菜園などの環境も整えられています。子どもたちの「なぜだろう」「もっと！」というようなやる気、好奇心を存分に満たし、さらなる探求心を育んでいく場、それが保育園です。」室内は多くこういう園が増えてきた。園庭がまだまだ広いようなところが多い。実は木や草が生えていて起伏があって菜園がある、これがフレーベルが提案した時のキンダーガーデン園庭。これを明治政府が禁止した。園庭は軍事共励の場なので整地して平らにして軍事共励をしなさいと校庭のように変えた。戦後こういうところに戻らないといけないが、多くは国が言ったような軍事共励のような園庭を園庭だと思い込んでい

引用元：なるほど！せたがやのほいく
〜遊びと学びがいっぱい〜
世田谷区の保育の質ガイドラインp10



引用元：前出と同じ

『人間として育てる“底力”を育てていきます』p10

る。「同時に、保育園は、子どもたちが仲間と共に育っていく場でもあります。一人ではできないことも力を合わせるとできるという実感は、育ちの上ではとても大切なことですが、それも仲間あってこそ。友達同士の関係性、関わり方にも保育士は目を配り、ここでもまた、必要十分な声掛けなどをしながら、子どもたち同士、互いに関わり合いながら育っていくよう、目立たない形で支え働きかけています。特にトラブルなどおこしながらも共に仲間同士育ちあっていくという実体験が、成長した後、またさらに大きくなって社会に出た後の、人と人との関係性で成り立っている社会で自立した人間として生きていく底力ともなっていくのです。」

—自発性を育てる工夫—

保育士の在り方がいわゆる見守る保育の時の保育者がどう支援するかヒントが書かれている。年長と参観に来て遊んでいる。保育者は活動は子どもたちが自発的にできることがポイント。先生が何かしましょうではなく、先生は何か仕掛けをする。町づくりをしているがこれは、実は遠足を機に街づくり遊びが流行っている。遠足の時に先生は説明している。子どもは町づくりをしたいと思う。その時に作れるように素材を置いておく。動機をつけることをまずする。やろうとするときに道具を置いておく、子どもの活動が停滞するときがある、先生がこれ使ってみたら?と停滞した時だけヒントを与える。必要そうな素材を用意し極力口を出さない。それからもう一つ、街づくりをした時に自分から遊びたい環境づくりとして、空から見た町という絵本を置いておく。そうするとこれを観る。絵本は物語を読みふけるだけでなく、活動のヒントとして用意しておく、さっき湖を作ろうとしていたのはこのためかと、絵本をただ読むだけでない用意しておく。遠足へ行くのもただどこかへ行くことではない。遊びのための刺激をさせる。帰ってきたら町が作れるような素材を置いておく、停滞したら助言するとか、遊びを広げるために図鑑を置いておく。直接しなさいではなくこういう保育。これが私が作ったのと言われるが見守る保育の仕方。何もしないことではなく、子どもが自発的に遊べるように環境を用意する。「子どもたちの関心は周囲360度縦横無尽。「何か面白いことはないかな。」「これは何だろう」そうした子どもの興味関心をぐっと深めていく。それが保育士の仕事でもあります、「次はこれ、その次はこれ!!」と子どもたちを束ねるような保育士が率先指導していく保育では、子どもたちは、言われたまま、言うことを聞く姿勢となってしまいます。子どもたちの日ごろの育ち（成長発達）、活動の様子を見取りながら子どもたちが垣間見せる「これ、面白そう〜!」という気配りを察知すること。その興味関心をさらに深め、広げていくように保育士は支えています。そのためには、保育士は常に“保育のポケット”が豊かになるように努力しています。子どもたちに伝えたら好奇心をもちそうな遊び、造形素材（用紙や粘土など）、抱いた疑問を自ら調べられるような図鑑などの用意。と同時に、子どもたちの思いもかけない質問にも答えられるように、保育士自身も日々学びを重ねています。」私は質問に答えられなくても一緒に不思議がるのが大事だと思っている。「中には、もともと友達同士での遊びがあまり得意では



引用元：前出と同じ

『自発性を育てる工夫をしています』



引用元：前出と同じ
『自発性を育てる工夫をしています』
p18

ない子供もいるでしょうし、どの子も一人静かに過ごしたいときもあるでしょう。保育士は、そうした一人ひとりの個性やその時々の様子を見取り、適切に必要な援助をしていきます。そしてこそ、子どもたち自身の発想から生まれる、保育園ならではの『子どもの学び=教育』が展開されていくのです。ひっかき噛みつきが書いてあったのでどう書いてあるかを参考にしてください。「保育園は、子どもたちが集団で育っていく場です。小競り合いのような小さいトラブルからダイナミックなけんかまで、いろいろなどやらかしてくれることも日常です。新入園したばかりで慣れない頃、また、1歳のころなどには、子どもたちの間で「かみつき」「ひっかき」がしばしばみられます。それは言葉でのコミュニケーションがまだまだ思うようにならないだけに、つい、手や口が出てしまうのです。(おしゃべりの口、ではなく、噛んでしまう方の口)。どんな時でも保育士は子どもたち全体～一人ひとりを見守ってはいますが、見張っているわけではありません。不意をついたかみつきやひっかきの発生はどうしても起こりえるのです。大事に至るようなケガであれば日ごろの医療機関との連携を活用してすぐさま手当てに動きますが、気持ちのも信頼で収まりそうな場合は、むしろ「噛んでしまった子ども」「噛まれてしまった子ども」両方の気持ちを大切にとりなしつつ、案じている保護者にも適切に状況を伝えていくようにしています。こういう人間関係のトラブル対処も、プロフェッショナルたる保育士の重要な仕事のひとつなのです。これを保護者に配るから新宿区もこういうの配ってもらえたらと思う。噛みつきひっかきは見守っているけれど、どうしても起きてしまう。気持ちに配慮して噛まれた子だけでなく噛んでしまった子に対して一方的に起こるのではなく、気持ちを伝えられないことに共感すること、噛まれてしまった子も我慢したりしていることを認めてあげることが大事。噛みつきひっかきをさせないことではない。プロは人間関係のトラブルに対して気持ちに共感してあげることと説明している。

—記録を通して保育を振り返り、保育の計画を立てています—



引用元：前出と同じ
『記録を通して保育を振り返り、保育の計画を立てています』p20

もう一つの説明で保育計画には、「たとえば、『ドキュメンテーション』。子どもたちの育ちや学びを可視化（見えるように表現）することですが、たとえば『今日こんなことがありました』という記録を、写真にキャプションを添えるようなスタイルで表現していくと、送迎で訪れる保護者の方々への何よりの保育実践報告となり、同時にそれは、保育士の保育実践記録ともなっていく。そうした記録で保育士自身が保育を振り返っていくことにより、次の展開はこうしていこうというような『保育計画（年間、月間、週そして毎日の日案というプラン）を立案していくことができます。その際、保育計画とはいっても、保育士が計画した通りに子どもたちを指導・誘導していくではありません。その時々の子どもの動きや育ちに応じて、当初立てた計画も柔軟に変更していったこそ、保育の指導計画といえます。子どもたちの日ごろの動きや興味関心を把握しているからこそ、『運動会ではこのような種目も子どもたちに提案してみよう』など考えることもできるのです。』私の園の運動会の予行演習は3週間前に行うが普段の運動遊びを見せていきます。その中で何を種目にす



引用元：前出と同じ

『記録を通して保育を振り返り、保育の計画を立てています』p20

るかを決めます。種目を決めて練習するのではなくて日頃を運動遊びを見てもらって、どれを種目にするかを決めています。最後、専門性とはどういうこと、見守る保育の課題について書かれている。避難訓練のシーンで先生たちのチームプレーにびっくりしていた。そうしたら、それは保育士の専門性です。チームワークをよくすることが専門性です。園は集団就活の場だから連携は欠かせない。一人の先生は喧嘩を見て、もうひとりはおみを出しに行ったりしている。大昔もこう過ごしてきたと言っている。コラ、けんかをやめるは専門性なしとここでは書かれている。専門性ありは、喧嘩を見て何処まで見守っていればいい、どこから介入すればいいかを考えている。これを専門性ありと言っている、ただ止めるのではなくどこまで自分たちでできるか、どこまで見守れるかどこから介入をするかが書かれている。今、ざっと世田谷区における保育の質を見てきたが、まさにこの辺りは私たちが目指してきた保育がスタンダード化し始めた。地方の方がよく見守る保育をしていない保育園が多いと、一斉にやっているというのが実は東京ではこういう保育がスタンダード化してきた。特にこども園ができた頃は子ども園は年齢別保育しなさいと言ってきたが、区切りはパーテーションでもいい、家具でもいいと言ってきた。うちは監査でこども園だから部屋を区切るようなことを言ってきた。その時に私が、ぜひお茶大付属こども園へ行ってみてくださいと言った。お茶大は一番幼児教育の研究をしている。345歳は異年齢で一部屋、区切りはないです。ロールカーテンはお昼寝をするときだけ分けて寝ていると言っていた。お茶代付属でさえ、そうなっている。私たちが特殊だと当初言われていた。実はどんどん普通になってきている。逆を言えばお茶代付属がそうなっているけれど、うちの副園長と職員がお茶大を見にいぎ写真を見せてもらった。写真を見たらG T園の 保育園がコーナー保育、ゾーン保育をはじめた初期のようなコーナーだった。子どもが一緒になって遊んでいない。幼稚園でもこういうことがはじめてまっている。韓国でもすべての園が全部コーナーで保育室の中に7か所くらい作られ、子どもが選択する保育がはじまっている。どんな風な関わりをもたせるかはまだまだできていない。今月末に韓国へ行くが1日私が園長先生向けの講演をしてほしいと頼まれている。私たちが提案する保育は特殊ではなく、スタンダード化かしてきて、それを先にはじめているからきちんとした考え方ができているのでそれを話してほしいと言われている。ぜひ皆さんの地域でそういう園が少ないかもしれないがこれが普通になってきている。世田谷区は冊子を配っているので保護者の皆さ、自分の通っている園の保育を見てくださいと言っている。ぜひ皆さんはそれぞれの地域でモデルになってこう言う保育を広げていってほしいと思います。私たちがしたいのは決して園児を多く自分の園に集めるような、特殊な保育をしているつもりはない。どの園でもやらなければならない子どもの育ちとして大事な形。言ったことをやらせる 保育から、子どもたちが自発的に遊びはじめ主体的に活動し始めること、これが世界共通です。最初にフィンランドの保育をお見せし・たが今回のセミナーでもドイツ報告があるが、どこでも同じです。せめてここだけは日本の全国の保育園・幼稚園がそうやってほしいという思いでこういうセミナーをやっ

ています。ぜひ皆さんは自信をもって日本で今に普通になっていく、こういう保育の中身を深めて色々な細かいことをお互いに見せていくことが大事だと思っています。地域のモデルになってほしいと思っているそのためにお互いが見合ったり、お互いが勉強し合って共通なものと一緒にして、そのうえで自分の園の特徴・地域性を出して言うことが重要だと思っている。ぜひ東京ではスタンダードになっていると園長にってください。自信をもって深めていくことを願っています。今回のセミナーでは実践園報告やドイツ報告など、どんな形をしているかを研修で学び持ち帰ってもらえたらと思っている。最初の話として基本的なこと、どこでもしないといけないことを話をしました。ありがとうございました。

本稿は、2017年10月16日に行われた第46回保育環境セミナーの基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)

参考サイト

1. [なるほど！せたがやのほいく～遊びと学びがいっぱい～ 世田谷区の保育の質ガイドライン](#)

発行 世田谷区 子ども・若者部保育課